

ノ ー ト

女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教職に関する意識の変容に関する考察

—平成16年度教育実習を通じて—

小 澤 滋 子*¹ 天 野 幸 子*² 尾 崎 沙和子*³
板 谷 幸 恵*⁴ 櫻 井 純 子*⁵

A Study on the Changes of Students' Awareness about the Teaching Profession in a Teaching Training Course of Home Economics at Kagawa Nutrition University
—Through the Experiences of Student Teaching in 2004—

Shigeko OZAWA*¹, Sachiko AMANO*², Sawako OZAKI*³,
Sachie ITADANI*⁴ and Junko SAKURAI*⁵

The aim of this study is to make clear some features of student substitute teaching of Home Economics during this year and especially, the changing process of students' awareness of the teaching profession through the experience of student substitute teaching at Kagawa Nutrition University in 2004. The authors found one of the features of these student-teachers was that they had practiced in their junior schools and had tried teaching not only Home Economics but Extra-Curricula, Moral Education and Integrated Studies. Most students became more conscious through their practice of substitute teaching, but the level of change corresponded to the education by the teachers in the junior or senior school and what the students understood. The authors discover some clues to improve our teacher education.

はじめに

平成15年度「女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察」¹⁾に続き、家庭科教職課程履修学生に関する研究報告である。

前回は、平成15年度より実習期間がそれまでの2週間から4週間に延長されたことを視野に入れ、学生の意識については2週間の実習期間であった平成12年度との比較を行った。さらに、教育実習において学生がどのようなことを感じ、会得したかを明らかにし、教育実習指導に関する問題点を探ることをねらいとして行った。その結果、教育実習を通して学生は確実に教職に関する理解を深め、さらに社会人としての視野を広げていることが明らかになった。また教員養成の立場として、中学校、高等学校の学習指導要領改訂による新カリキュラム

や実習期間の延長に伴っての教育実習内容の変化に対応する必要が緊急の課題となった。これらのことを踏まえて平成16年度については、教育実習事前指導等を中心にカリキュラム編成やその内容の検討、改善を図ってきたところである。

本年度は教育実習期間延長後2年目となり、事前ならびに事後指導の内容に改善を加えた本学の教育実習に関する特徴を示すとともに、特に、教育実習前と後の教職に対する学生の意識の変化を探りたい。それを通じて今後の教員養成のカリキュラムやその編成の一層の改善方策を探るなど、本学における今後の教師養成の充実改善を図る一助とすることをねらいとして本研究を進めた。

本稿で考察のために用いたものは、学生の「教育実習録」及び「教育実習報告会資料」、「自由記述法ならびに選択肢法による振り返り調査」の結果である。

*¹ 教職第一研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Teacher Education I, Kagawa Nutrition University.

*² 教育心理学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Educational Psychology, Kagawa Nutrition University.

*³ 教職第二研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Teacher Education II, Kagawa Nutrition University.

*⁴ 介護・保健学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Health and Caring Education, Kagawa Nutrition University.

*⁵ 家庭科教育学研究室, 女子栄養大学: Laboratory of Home Economics Education, Kagawa Nutrition University.

I. 平成16年度教育実習のプロフィール

平成16年度の家庭科教育実習生は44名である。本学では、母校における実習を原則としているので、41名の学生が、出身校で実習を行った。残りの3名は、実習校の家庭科担当教員の体制が整わないこと、母校の受け入れ規準に対応できないことから、協力校で実習を行った。学校種別は、中学校31.8%、高等学校56.8%、中・高一貫校11.4%であり、例年に比べ中学校での実習の割合が増加している。

教育実習校を地域別にみると、埼玉県が最も多く、関東地域に集中している。その他、長野県、新潟県、静岡県、鹿児島県である。昨年度は、17都県と範囲が全国に広がっていたのに対し今年度は近県に集中している。

実習期間は全員が3週間の実習であり、実習時期は5月から6月中に集中し、4名の学生は9月実習である。したがって考察の対象となるのは、実習終了者40名である。

1. 教育実習事前指導

平成16年度の教育実習事前指導は、4月5日から4月14日まで6日間の集中講義として行った。表1にそのプログラムを示した。

教育実習事前指導の計画に当たっては、教職に関する科目及び教科（家庭）に関する科目の講義だけでなく、学生が教育現場の実情や変化する教育課題を理解し、その対応を考える力をつけることに留意し、中学校並びに高等学校の現職教員の講話を組み入れた。平成14年度から「自己表現の時間」を設けた。そのねらいとしては、自分の意見をまとめ、考えを的確に表現できるように、また他者を理解する力を培うことである。

本年度の事前指導としては新たに「総合的な学習の時間のねらいと指導」と「教育実習にむけて作成したビデオの視聴」を取り入れた²⁾。

「総合的な学習の時間」の指導では、これが今日の学習指導要領に設けられた経緯にかかわった専門家から、体験を通して、自らが問題を発見し解決する学習の持つ重要性の説明を受けた。

ビデオ視聴については、教材として、櫻井らが科学研

表1 平成16年度 教育実習指導（事前・事後）日程表

栄養科学専攻4年生（家庭科）

教室：1402番教室

4301番教室（7/14）

2201番教室（7/15）

月・日	I（9:20～10:50）	II（11:00～12:30）	III（13:20～14:50）	IV（15:00～16:30）
4月 5日（月）	教育実習にあたって 本学教員	家庭科教員に 求められる資質・能力 本学教員	情報機器活用の授業 本学教員 ＜コンピューター室I＞	
7日（水）	総合的な学習の時間の ねらいと指導 特別講師	教育実習生への願い －中・高の教育現場から－ 特別講師	特別活動の指導 特別講師	食育・学校給食 本学教員
10日（土）	乳幼児理解の学習 高等学校家庭科現職教員	家族・家庭生活の指導 高等学校家庭科現職教員	家庭科の学習指導 高等学校現職教員（教頭）	
12日（月）	実習上の事務手続き 本学教員	食物の指導 本学教員	教育実習の意義 （教育実習のVTRの視聴を含む） 本学教員	
13日（火）	道徳の指導 特別講師	自己表現の時間 本学教員		住居の指導 本学教員
14日（水）	調理実習の指導（模擬授業） 本学教員 ＜調理実習室＞		実習録の書き方 本学教員	「家庭総合」授業の例を見て 本学教員
7月 14日（水）、 15日（木）	教育実習報告会 本学教員・特別講師			

究費の助成を得て制作した「高等学校の一日～家庭科教員を中心に～」ならびに「家庭総合の授業」の2本を用いた。前者は家庭科教員四野宮淳子教諭（千葉県立君津青葉高等学校）の一日を追ったものであり、後者は同教諭による「家庭総合」の授業実践をまとめたものである³⁾。

2. 実習校における教育実習

実習期間中の流れは、概ね1週目は指導教諭の授業を「観察」し、2週目は「参加」あるいは「授業実習」を行い、3週目は自分で作成した指導案に基づいての「授業実習」である。特に「観察」においては、授業の構成、展開、方法を学ぶことに止まらず、一人一人の生徒の様々な場面での姿を理解する機会やまた、学生にとってその後の実習生としての授業実習について、生徒の主体的な学習活動を展開しその方法を考える機会となっている。これについてはⅡにおいて具体的に示す。

1) 授業実習について

授業実習の担当時間は、中学校、高等学校、中・高等学校とも概ね10時間から19時間に集中している。平均担当時間数は、中学校15.33時間、高等学校16.54時間、中・高等学校15.25時間であり学校種別の差はあまり見られない。担当時間数は、中学校では30時間から6時間、高等学校では27時間から6時間とであり実習校によって大きな差がある。

授業担当の内容としては、中学及び高等学校とも「食」に関する授業が最も多い。これは、多くの場合、家庭科年間指導計画が、1学期に「食」に関する分野を多く計画していること、また本学の専門性を生かした授業を担当させようという実習校の指導教諭の配慮もあるのではないだろうか。

2) 教科外活動について

実習生は、中学校であれ高等学校であれ特別活動の全分野に参加している。特に、中学校学級活動では、学校給食及び清掃指導を通して、生徒理解を深めたようである。高等学校では、「将来の生き方と進路」のテーマのもとに大学生活を中心に自分の生き方と経験を話し、本学の紹介を行った学生も多く見られた。

「道徳」の授業は、中学校で実習した学生の半数が担当している。

教科外活動への参加は、生徒とのコミュニケーションを図り、生徒の実態に直接触れる貴重な体験となり、生徒指導について具体的にその場その場に応じた対応を考える機会となっている。

3) 「総合的な学習の時間」について

「総合的な学習の時間」の授業は、担当した学生は極めて少ない。行われている内容は、中学校では「町のオリエンテーリング」、高等学校では「車いすの利用」「食生活をみなおす」「教育実習生キャリアを語る」「国際理解について考える」「読書」「大学の紹介」となっている。

3. 教育実習事後指導

事後指導は、自らの実習体験を報告することならびに他者の報告を聞き実習で得た事柄を確認し、今後の各自の教職に対する課題を明らかにするためのものである。従来は一日であったが、本年度は自分にとって実習の意義を意識化させるために2日間かけて行った。第1日目は、「教師に求められる資質・能力について」各グループ5～6名に分かれて、様々な体験を出し合い、それを共有し自分の考えをまとめさせ、2日目は外部特別講師及び関係教員出席のもとに報告会を開催した。2日目の報告会のテーマは「教育実習を通して、教師に求められる様々な資質・能力の中で、今必要なものは何であると考えましたか。またなぜそうように考えましたか」とし、学生各自に3分から4分の発表をさせた。引き続き、外部講師から講評ならびに講話を受けた。そのことにより、各自の実習体験をより明確化させ、教職の意義の意識化をはからせた。

ちなみに、本年度実習生の教職の意識の変容を明らかにする意味から本年度実習生が3年次に、先輩である4年生の教育実習報告会に出席した折に求めた自由記述の一部を参照したい。「次年度の自分たちの教育実習に対する抱負」についての学生の記述の中では、教育実習は「大変そうだ」という不安の気持ちをはじませながらも、「笑顔」で「生徒とのコミュニケーションをとることを大切に」、「失敗を恐れず、努力していきたい」という前向きな姿勢が示されていた。

このような昨年度における記述と今回、教育実習報告会における報告とを比較すると、教育実習生として学校教育の現場を体験することを通して、既成の観念で授業、あるいは生徒、教師、教材・学習材をみるのではなく、それらを多様な角度から改めてとらえなおしていく必要があることを多くの学生が感じたことがわかる。

Ⅱ. 実習生の実習所感—教育実習録の分析

教育実習を行った40名それぞれの教育実習録から、教職への意識変容に関連する記述を拾いあげる。

実習第一日目に、学校長や教頭から講話というかたちで実習生はオリエンテーションを受けている。そこでは主として教師に求められる資質と力量、使命感、専門的知識と技術、能力、生徒への深い愛情と理解、豊かな人間性など未来の教師としての実習生への要求と期待、あるべき姿が示され、実習生は教師としての自覚と責任、実習に臨む心構えが出来たと述べている。

実習生は、家庭科担当教諭のクラスに配属され、家庭科という教科の特徴とそれぞれの生徒への対応など生徒理解に関する指導も受けている。

実習所感には、実習終了後だけでなく、他者の授業を参観したり、指導教諭からの指導、助言を得て毎日の自らの実践を振り返り、心に残った事柄が記述されている。これらの記述は、実習生の教職に対する意識変容を引き起こす要因となっているものと考えられる。実

習生が気づき納得し、実感を込めて記述している例を以下に示す。

1. 授業を「観察」して

教師の授業を「観察」した時は授業の構成、展開、方法のみならず、教師として必要な資質、能力、教育への姿勢に関する記述が多い。特に、導入で生徒を学習活動に引き込んでいくやり方の見事さに感銘を受けている。

自分以外の実習生の授業を「観察」した時には、常に自分と比較して観察しているためであろうか、細かな部分の記述が目につく。家庭科と関連した他教科の授業を観察した時には、教科によって視点の違いから内容の取り扱いが異なることに気付いている。生徒への発問、投問など生徒とのやりとりが少なかった、机間指導がなかったなどといった感想ももったようだ。

- * 生徒との信頼関係を築き、教師としての自信をもった態度が必要だ。そのためには教材研究を十分にを行い、あやふやな知識やいい加減な知識ではなく、また確かな知識と技術を日々の自分自身の生活を見直し、磨いておく必要がある。
- * 生徒の何気ない一言を拾い上げ、授業に活かしている。一人一人の答えを大切にし、個を生かす学習を実践している。
- * 授業中の生徒とのやり取りのなかで、生徒の理解度を把握し、授業の進め方を変えるなど状況に合った適切な生徒への対応をしていた。教師には状況にあった柔軟性、臨機応変な態度、能力が必要だ。
- * 漢字の学習なんて、面白くもなんともない、極、当り前の教材なのに、クイズを取り入れるなど、とても面白かった。授業は工夫次第でこんなにも生き生きと生徒たちを授業に参加させることが出来るのかと思った。
- * 考える力がつく授業とは物事の仕組みを解り易く伝えることだ。
- * 先生の講義がわかりやすく、面白い理由がわかった。生徒への問いかけと生徒からの応答、またそれへの対応というかたちで授業が進み、学習内容を様々な媒体を用いてイメージしやすく、身近に感じられるようにわかりやすいことばでポイントを押さえた表現をしている。
- * 道徳教育の目標である「道徳性を養う」を中学生の行動に置き換えると人はみな、いいことだと解っていてもなかなか行動に移せない。それを阻んでいるものを授業で資料から客観的にとらえて、生徒一人一人が自分におきかえ共感し、自覚を深めていく作業で、心の変容が大切なのだということがわかった。

2. 授業を担当して

実際、授業を担当することにより、予想していなかった生徒の姿に気付かされている。例えば、実習生にとっては当然であると考えていたことに対する生徒からの質問、あるいは日常生活で身につけているはずの事柄が出

来ないなどである。

- * 実習生であっても教師と同じように生徒は質問してくる。「参加」の授業であっても、教材研究を十分にを行い、「その授業で伝えたいことは何か」を明確に理解し、把握しておく必要がある。それが自信になっていい授業が出来る。また断片的な知識ではなく、関連する広い範囲の内容についての理解があつてこそ、いい授業ができる。
- * 実生活からの情報を伝えるなど、身近な話題を取り上げ、生徒の興味を惹き、学習へのきっかけを作ると、生徒は授業に集中する。
- * 「授業をする」ということは自分自身が十分に理解した上で、かみ砕いて生徒が理解できることばで、的確に伝えることが重要なのだ。
- * 家庭科の授業とは自己管理能力を育てることにその目的があることを実感した。
- * 一生懸命作業に取り込み、変化していく生徒の様子が見えた時、喜びを感じる。教師という仕事の醍醐味だ。
- * 示範は単に生徒にやり方を示すことではなく、生徒とのやり取りを大切に進めて行く中で生徒理解を深めることができる場でもあることがわかった。
- * 表面にはあらわれない準備や後かたづけなど、教師の仕事には計画や準備が大切で、それをきちんと行っておかないといい授業はできない。また実習の授業では教師が何もかも指示するのではなく、生徒に任せ、「教師は生徒を援助する」そのような態度の必要性を感じた。

このように、いつ、いかなる場面であっても、実習期間中に体験したことの一つ一つが実習生を大きく育てている。教師という仕事の重さがわかったという思いに止まらず、人は支え合って生きているということ、今までの自分は人への優しさや、配慮に欠けていたこと等を反省するまでに至っている。

III. 教育実習生の意識変容についての調査

1. 目的と方法

教育実習直後の報告会において、学生の教職に対する意識の向上が見られることは例年実感され、それについてはすでに考察してきた⁴⁻⁶⁾。しかし、学生がどのような動機や努力でどのように教職に対して意識が変化していくのか、期間を限定して、そのプロセスを探ることは行われてはいない。したがって、今回これを明らかにする目的で自由記述法ならびに選択肢法による調査を行った。調査は、事後指導の第1日目に行った。教育実習に関しての振り返り調査である。調査内容は(1)実習校へのアプローチの時期、(2)担当分野の内容把握の時期と方法、(3)担任の仕事の把握、(4)授業準備、(5)担当教科以外の指導について、(6)教職への関心である。

また、表3に示す選択肢法による調査も同日、行った。調査事項は大別すると、(1)実習体験後の日常生活における変化、(2)教職そのものの見方の変化、(3)(教師

になるとしたら)今後身につけることがらは何か、である。いずれも5段階評価で回答を求めた。これは、小澤らが平成11年度科学研究費補助金の助成を受け実施した調査の選択肢の一部であり、昨年本学教育実習生を対象に実施したものと同じである^{7,8)}。それとの比較対照の意味で今回もこれを使用した。前者の6項目からなる調査と、3項目からなる調査の内容関連は、後者の選択肢法によるものは、教育実習の意識をめぐって一般的、包括的な項目が多いのに対して、前者は教育実習担当教科としての家庭科への意識をたずねている。両者を通じて教育実習との関連で学生の意識の変化を探ることにした。

以下にその調査結果ならびに考察を記したい。

2. 調査結果ならびに考察—調査Aならびに調査Bから<調査Aについて>

(1) 実習校へのアプローチ

実習校へのアプローチは4年次になって始めた学生は40名中24名(60.0%)であるが、16名(40.0%)は3年次から始めている。実習校へのアプローチが早いほど意識の変容が促されるのではないかと予測し、以下3年次グループ(16名)と4年次グループ(24名)とに分けて分析した。(以下3年次G・4年次Gと表記)。

①学校要覧の入手

教育実習が始まるまでに学校要覧を入手したか、については、3年次Gの方が若干その割合が高かった。

②家庭科教諭との打合わせ

3年次G16名のうち、12名が3年次の4月～6月まで、また3名が9月には家庭科教諭との打ち合わせを始めているのに対し、4年次Gでは実習直前の5月が最も多い。また、打ち合わせ回数を見ると、3年次Gでは最多で6回、平均3.5回であるのに対し、4年次Gでは1.8回で、打合せ回数では両者に相違が見られた。

③担当する分野や内容が分かった時期

両グループとも担当する分野や内容が分かるのは、実習年の5月が最も多く(62.5%)、4月(25.0%)、そして6月(8.3%)の順となっている。このことから学生が担当する分野や内容は、実習直前の5月になるまで把握できていないことがわかる。

④実習校との打合せ

この問いは、実習校から実習生に対する教育実習に関する打合せのことである。

実習校による打合せ日には、校長・副校長・教頭を始め、教育実習担当教諭からの細かい指導・指示があり、同時に家庭科教諭や担当クラスの教諭からの具体的な指導も行われている。

実習校からの打合せに関しては、3年次G、4年次Gと、概ね4年次の5月(72.5%)を最多として6月(15%)、4月(10%)と実習直前に集中している。

早期の、或いは数度にわたる打合せは、学生の教育実習に対する意識を高めるものと思われるが、打合せの日程や回数は実習校の事情に依存せざるを得ない実

状である。

(2) 担当分野の内容把握について

①授業の準備を始めた時期

両グループとも授業の準備を始めたのは4年次の5月頃からが最多(57.5%)で、次いで多かったのは4月頃(10%)からであった。この時期は、授業の分野や内容が具体的に分かった時期(前述)とはほぼ一致しているが、全体的に授業の準備が遅いようである(90%)。また、3年次Gの中には3年次の4月頃から準備を始めている学生もいる(1名)。4年次Gでは実習直前の6月になって始めて準備をした学生もいる(3名)。

②教科書や指導要領の検討(以下の項目については、実習前と実習中・後の意識の比較である)

実習前は「十分にしたと思う」「したと思う」を合わせた割合は51.3%であったが、実習後は67.5%に増加し、努力の様子がうかがわれる。一方、「しなかった」「全くしなかった」の割合は28.5%から10%に減少している。実習後では「全くしなかった」は皆無である。

③指導内容に関する情報の入手

実習前に50%以下であった指導教諭からの指導及び教師用指導書の参照は、実習後には各々86%、53.8%と変化し、この二者は授業する上では不可欠なものであることが分かる。少なくとも指導教諭との接触は早期からが望ましい。

④その他

その他で挙げられた内容は、「大学で受けた授業内容や資料、大学の教科書・プリント」を始め、「消費者センターや市役所へ出向き話を聞く、また資料をもらう」「関連ビデオ、写真、実物の準備」「実習先からいただいた資料、学習ノート」「他教科の教諭から話を聞く」等、他種多岐にわたっている。生活を学ぶ家庭科について、生徒の理解力を高め、それを生活に活用できる力をつける授業を行うための様々な努力をしている。

(3) 担任の仕事の把握

実習前、「十分に把握した」「把握した」は25.5%であったが、実習後は57.5%となっている。一方、「不足していた」「全く不足していた」は、実習前が38.4%であったのに対し、実習後は10%に減少している。「全く不足していた」は皆無である。

(4) 授業の準備について

資料の収集や学習指導案についての実習前の評価は総じて高く(実習前3.3・3.5、実習後3.8)、実習後の較差は0.5以内と少なかった。実習前には3.0以下であった補助教材の作成・準備、板書(誤字、筆順等)、声の大きさ・言葉づかい等に関しては、授業を担当して初めてその必要性を強く感じたためか、実習後には約1.0ポイント上昇している。

(5) 担当教科以外の指導について

内容がわかった時期は5月ごろが最も多く、40%、つ

いで6月ごろ35%となっており、いずれも4年次になってからである。その内容は、特別活動のことが多く、ホームルームでの進路指導に関すること、合唱コンクール、体育祭などの練習等があげられている。それらの内容の検討について、自分自身をふりかえっての意識では、実習「前」の3.0が「中」では3.5、実習の中で検討していることがわかる。準備の具体的内容は、たとえば、ホームルームにおける進路指導の関係では、大学のパンフレットを読み、自分がどのように受験へのステップを踏んだかをノートにまとめたりしている。

(6) 教職への関心

「教育実習を終えた今、自分の中で変化したと思われるところ」及び「中学生・高校生とは」、「家庭科とは」、「教職とは」の自由記述の質問に未記入の5名を除いた35名の結果である。

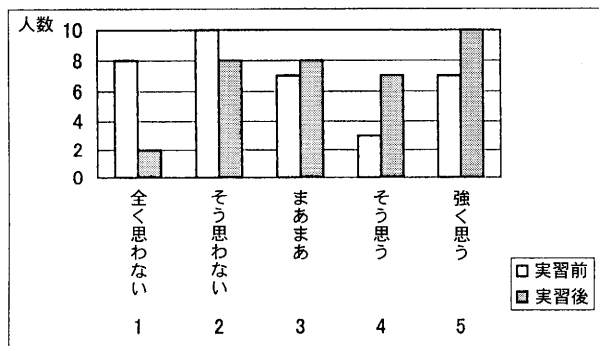


図1 「教職に就きたい」意志の変容

表2 「教職に就きたい」意志の変容 (人)

段階	変化せず					計
	1へ	2へ	3へ	4へ	5へ	
1から	2	2	1	2	1	8
2から		4	6			10
3から			1	4	2	7
4から		2			1	3
5から				1	6	7
計	2	8	8	7	10	35

図1は「教職に就きたい」と意志表示した人数を段階別に実習前と実習後について表したものである。実習前は段階1の「教職に就きたいとは全く思わない」の人数が実習後には1/4に減少し、一方、段階4・5の人数が増加している。「教職に就きたい」との意識が実習前より実習後の方が全体の傾向として強くなっている(実習前の平均値は2.7、実習後は3.4)。表2は、実習前後の結果を段階別にクロスしたものである。

図1では「教職に就きたいという強い意志」をもって実習に臨んだ学生は7名(20%)であった。それ以外の学生は「教職に就きたいと思う」が3名(8.6%)、「まあまあ」が7名(20%)、「そう思わない」が10名(28.6%)、「全く思わない」が8名(22.9%)であった。この

ことから実習前は「教員になりたい」という意志を持たずに、というよりむしろ教職に対して否定的な気持ちで実習に望んだ学生が50%もいたことがわかる。

しかし、実習後は表2に示す通りで、35名中3名(7.7%)は意識の下降がみられ、7名(20%)は変容が見られなかったものの、残る29名中19名(65.5%、「教職に就きたい」との強い思いに変化のなかった6名は除く)の学生は、上昇度は様々であるが、実習前に意思表示した段階より1~4ランク上昇し、確実に「教職への意識」が変容している。

実習前、「教職に就きたい」の意思表示が1あるいは2と低い学生の実習後の「教職について」の記述を見ると、その変容ぶりには目を見張るものがある。実習前に抱いていた「教師という職業への気持ち」は次のようである。

「中学・高校生は子どもっぽいところはあるが怖い」、「家庭科は楽勝科目だが、生徒からは嫌われるのでは」、「教師に対してあまりいい印象を持っていなかった」、「教師という仕事にあまり魅力を感じていなかった」、「教職には就きたくないという気持ちがあった」、「教職課程を学んで教職は大変な職業と思っていた」、「教職には全く興味がない」、「授業や生徒のことを考えると実習は不安ですごく憂鬱だった」、「教職は様々な問題があるため難しい職業と捉えていた」、「子どもは生意気。先生は世間知らず。面倒くさい職業」等々。

以上から、教職への意識の低い学生は実習前には自分の中学・高校生時代の体験や今日の生徒の実態等から、教育実習は「恐ろしいもの」、「不安で憂鬱なもの」という気持ちを抱き、また教師や家庭科を「思いこみによる偏った教師観・家庭科観」でとらえていたようであり、否定的あるいはやや反抗的な認識や姿勢の中で教育実習をスタートさせている状況がある。しかし、実習後の数値は、表2に示したように上昇した学生が多かった。その変容ぶりを記述の中から拾ってみると、上昇した学生は勿論、実習後も評価を変えなかった学生においても、同じような傾向である。

「大変やりがいのある職業と感じた」、「高校生を見る目が批判的から今は好意的に変わった」、「教職は楽しいという気持ちになった」、「教師の面白さを味わえ、この職業に興味をもてるようになった」、「教師という職業の大切さ、すばらしさが分かった」、「やりがいのある職業だ。教員になりたいと思うようになった」等と、否定的・批判的なことばから受容的・肯定的、さらには意欲的なことばに変わっている。

一方、既に「教職に就きたい」という意志を明確に表示している4段階、5段階の学生は、「大変な仕事だと身にしみて分かったが、やりがいはあると感じた。生徒が授業を理解してくれたことがあんなに嬉しいこととは思わなかった」、「生徒の実態に即した授業、生徒が自ら考え、課題を見つけ、改善していこうとする意欲を持たせる授業が大切だ、と考えられるようになった」、「教師っ

ですばらしい」等と、教職への思いを深めている。

ここで、評価が下降した3名についてみる。いずれも実習前は「教職に就きたい」との強い気持ちをもっていた学生である。実習後以下のように述べている。

「自分の一生をかけられる人がするべきだ。それほど教師の仕事は責任が重い」、「先生次第で生徒がどうにでもなる」、「教師間の人間関係、生徒に対する見方や考え方が分かり、教師への意欲が失せた」、「人を教えらるほどの力量が自分にはまだない気がする」等。教育実習は自分自身を見つめる機会、また人との関係が強い教職について改めて考えさせる機会ともなっている。

意識の変容をもたらした要因を探ってみると、実習期間中は一教員として自ら授業を行い、担任の仕事も一部経験する。当然責任も持たされる。見習い教員という甘えは許されない。一方、指導教諭や実習生を受入れている多くの教員の支えや教職を目指す仲間もいる。コミュニケーションがとれれば生徒からの協力も得られる。実習生の積極性や意欲的な働きかけ次第で収穫も大きくなる。

しかし、実習生の直面する難問や課題解決の方法は、まず学生自らが努力、反省、思考、試行のくり返しの中で身につけていかねばならない。そのような中で学生はどのような努力や働きかけをしたのだろう。教職に対する意識は何故変容したのだろう。意思表示が上昇した学生の記述から、それらを裏付けることばを拾ってみる。

「教材研究の重要さが身にしみて分かった」、「分かりやすく教えるためには自分がよく分かっているといえない。教えるためには生徒理解も大切だ」、「生徒の心を開かせるためにはまず教師が心を開かなければならないことが分かった」、「相手の良いところを見つめる努力ができた」、「人前で話す自信がついた」、「言葉遣いに注意しなければ」、「一人で抱え込まず他者とコミュニケーションをとり連携することの大切さを学んだ」、「相手に誠意をもって接するようになった」、「叱るところは叱る。褒めるところは褒める。そのけじめを心掛けた」、「字をきれいに丁寧に書こうと思った」、「教師は常に勉強しなければならない」。

以上のような実習生の努力の成果は、生徒のことばや表情・しぐさ等を通して実感され、教師にとっては感動であり、一番嬉しいことなのである。その喜びが次の力と呼ぶ。「生徒一人一人考え方が異なることの難しさを感じている」からこそ、努力が報われることがこんなに嬉しく、やりがいを感じるができるのである。そこに多くの学生から、「教師という仕事は難しいけれどやりがいがある」ということばが表出したものと推測できる。

実習前の「教職とは」のコメントを概観すると「生徒に教える」、「教え諭す」、「生徒に知識を与える」、「生徒の人生に影響を与える」、「人と人が向き合い、自分の知識を教えていく」等のことばが目立ち、「何とかなる」、「甘く見ていた」とのことばからも分かるように、高い

立場から生徒を導いてくる、その練習をするのが教育実習であるにとらえ、「教育実習は自分の担当する内容を教える」、「分かりやすく教えてあげよう」といった気持ちで実習に臨んだ学生が多かったようである。しかし、そうではなかったことを身をもって知ることになる。

アンケートにおける学生の記述からは、以下のような教職への思いが散見される。

「教えるためには生徒理解も大切」、「学習面だけでなく生活面の指導も行い、次世代を育てる仕事だ」、「家庭科は生活の自立という人間にとって不可欠な教科」、「教師は生徒と共に学べる」、「教育＝共育の意味がよく分かった」、「人を育て、自分も育つ職業である」等。

また実習前に「次世代を担う人材の育成」、「人を育てる」、「生徒の人格を形成する」を挙げていた学生は、大学の授業で学び、頭のなかでは理解していたことばの意味を、教育実習を経験したことにより、はじめて実感したであろう。

「教職がどういうものかあまり理解をしていなかった」学生は、「教師は責任が重い。一人だけではできない職業だ。自分の一生をかける覚悟で挑まなければならない」と述べている。

そして、さらには「人のために努力することの心地よさを感じている」、「協力することの苦勞を感じなくなった」、「大学の先生方の気持ちが分かった」、「奉仕したいという気持ちが湧いた」、「先生に対する気持ちが変わった」等の記述も見られ、「実習を経験して初めて分かることがたくさんあった」からも推測できるように、学生は教育実習によって様々なことを学び、自分自身を見つめ、人と人とのなかで確実に人間的に幅広く成長している、ととらえることが出来る。

<調査Bについて>

ここでは、表3に示した調査結果にもとづき、学生の教育実習前の意識が教育実習後どのように変化したのかについて分析する。数値は前述のように5段階評価の平均値である。

まず、8つの小項目からなる(1)の中で、自分が変わったとする数値の高い項目は、「人間関係を大事にするようになった」(4.4)、「相手の気持ちを考えるようになった」(4.3)である。いずれも、「そう思わない」、「全くそうは思わない」としている者は皆無である。

実習生とはいえ、教師の立場で多様な、かつ大勢の生徒への対応に迫られ、人間関係の大切さを実感したことによるものと考えられる。これは昨年と同様の結果⁹⁾でもある。次いで、高いのは「教育問題について関心が強くなった」(4.0)である。紙幅の関係上、学生の具体的記述をとりあげるのはひかえるがマスコミの報道を通じ昨今の学校教育や生徒をめぐる事件や問題を傍観的にとらえてきたことが従来の教職の関係科目のレポートでも示されてきた。しかし今、現実に自分の学校現場に引き寄せて、これらを主体的に考える態度が形成されてき

表3 調査B

(H16) あなたの教育実習をふりかえって、あなたの意識はどのように変わったと思いますか。

以下の各項目について、() の中に下記の尺度「1」～「5」の数字を記入して、
あなたの気持ちを表してください。



(1) 実習体験後、日常生活において

- ・自らの学習に真剣になった () 3.7
- ・生活が規則正しくなった () 3.7
- ・教育問題について関心が強くなった () 4.0
- ・話すことが論理的になった () 3.2
- ・相手の気持ちを考えるようになった () 4.3
- ・人間関係を大事にするようになった () 4.4
- ・積極性が出てきた () 3.9
- ・（公共心等）道徳的問題を真面目に考えるようになった () 3.6

(2) 教職そのものについて

* 左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、
「1」～「5」の数字で記入してください。

	実習前	実習中・後
・非常に魅力を感じる仕事である	() 3.0	[] 4.0
・子どもの成長・発達に関わる重要な仕事である	() 4.1	[] 4.7
・子ども愛・教育愛にささえられた尊い仕事である	() 3.4	[] 4.2
・自主的・創造的な活動ができる仕事である	() 3.2	[] 3.9
・理想とする社会の実現に貢献できる仕事である	() 3.1	[] 3.7

(3) (教師になるとしたら自分が) 今後身につけることがら

* 左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、
「1」～「5」の数字で記入してください。

	実習前	実習中・後
・幅広く深い一般教養	() 4.2	[] 4.8
・専門分野（教科専門）の学力	() 4.7	[] 4.9
・教職に関する基本的な教養	() 4.2	[] 4.6
・学習指導の理論と技術	() 4.3	[] 4.6
・生徒指導・生活指導の理論と技術	() 4.3	[] 4.6
・教師集団の一員としてのあり方	() 3.7	[] 4.2
・子どもの人権についての理解	() 4.0	[] 4.5
・社会性	() 4.2	[] 4.6
・優れた人格	() 4.3	[] 4.3
・豊かな人生経験	() 4.4	[] 4.9
・充実した体力	() 4.0	[] 4.8
・何らかの特技	() 3.6	[] 4.4

調査A (2004年7月15日, 教職課程・家庭科委員会) <実習前>

I. 教育実習前のあなたについておたずねします。

該当番号には○を, () 内には数字や言葉を入れて下さい。その他の欄 () は自由記述です。

(1) 実習校へのアプローチは, いつ, 誰と, どんなやり方で行いましたか。

- ① 実習校についての把握 1. 事前に要覧を入手した 2. しなかった
 ② 家庭科教諭 (担任) との関わり () 年次の () 月頃から () 回目
 ③ 担当の分野や内容が分かった時期 () 年次の () 月頃
 ④ 実習校との打ち合わせ () 年次の () 月 () 日
 面会者 1. 校長 2. 教頭 3. 教育実習担当教諭 4. 家庭科教諭 5. 担任
 指導を受けた内容を具体的に, 簡潔に書いてください。

()

(2) 担当分野の内容把握について

- ① 授業の準備を始めた時期 () 年次の () 月頃から
 ② 教科書や指導要領の検討 (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ③ 指導内容に関する情報の入手 (複数回答可)
 1. 教科書 2. 教師用指導書 3. 学習指導要領の解説 4. 専門図書
 5. 新聞・雑誌・テレビ 6. 指導教諭 7. 大学教員 8. インターネット
 ④ その他 ()

(3) 担任の仕事の把握について (十分に把握した) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)

具体的に記してください。

()

(4) 授業の準備について

- ① 資料の収集 (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ② 学習指導案 (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ③ 補助教材の作成・準備 (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ④ 板書 (誤字・筆順・大きさ・速度) (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ⑤ 声の大きさ・言葉づかい (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ⑥ その他 ()

(5) 担当教科以外の指導について (道徳教育, その他)

- ① 内容が分かった時期 () 年次の () 月頃
 ② その内容 ()
 ③ 内容の検討 (十分にしたと思う) 5. 4. 3. 2. 1. (しなかった)
 ④ 準備はどのようにしましたか。具体的に記してください。

()

(6) 教職への関心について (②～④の空欄にはあなたの考えを記してください。)

- ① 『教職に就きたい』 (強くそう思う) 5. 4. 3. 2. 1. (全く思わない)
 ② 中学生・高校生は () である。
 その理由 ()
 ③ 家庭科とは () という教科である。
 その理由 ()
 ④ 教職とは () という職業である。
 その理由 ()

Ⅱ. 教育実習を終えた今、実習時を振り返って、以下の項目に答えてください。 <実習後>

該当番号には○を、() 内には数字や言葉を入れて下さい。その他の欄 () は自由記述です。

(1) 担当分野の内容把握について

① 教科書や指導要領の検討 (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

② 指導内容に関する情報の入手 (複数回答可)

1. 教科書 2. 教師用指導書 3. 学習指導要領の解説 4. 専門図書
5. 新聞・雑誌・テレビ 6. 指導教諭 7. 大学教員 8. インターネット

③ その他 ()

(2) 担任の仕事の把握について

(十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

具体的に記してください。

()

(3) 授業の準備について

① 資料の収集 (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

② 学習指導案 (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

③ 補助教材の作成・準備 (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

④ 板書 (誤字・筆順・大きさ・速度) (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

⑤ 声の大きさ・言葉づかい (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

⑥ その他 ()

(4) 担当教科以外の指導について (道徳教育, その他)

① 内容の検討 (十分であった) 5. 4. 3. 2. 1. (不足していた)

② 具体的に記してください。

()

(5) 教職への関心について (②～④の空欄には今のあなたの考えを記してください。)

① 『教職に就きたい』 (強くそう思う) 5. 4. 3. 2. 1. (全く思わない)

② 中学生・高校生は () である。
その理由 ()

③ 家庭科とは () という教科である。
その理由 ()

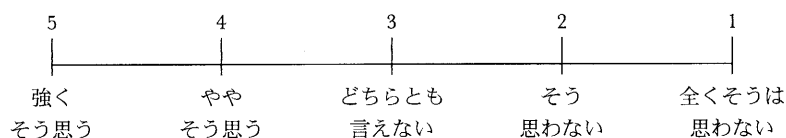
④ 教職とは () という職業である。
その理由 ()

(6) 教育実習を終えた今、自分の中で変化したと思われるところを記してください。

調査B

(H16) あなたの教育実習をふりかえって、あなたの意識はどのように変わったと思いますか。

以下の各項目について、() の中に下記の尺度「1」～「5」の数字を記入して、
あなたの気持ちを表してください。



(1) 実習体験後、日常生活において

- ・自らの学習に真剣になった ()
- ・生活が規則正しくなった ()
- ・教育問題について関心が強くなった ()
- ・話すことが論理的になった ()
- ・相手の気持ちを考えるようになった ()
- ・人間関係を大事にするようになった ()
- ・積極性が出てきた ()
- ・（公共心等）道徳的問題を真面目に考えるようになった ()

(2) 教職そのものについて

* 左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、
「1」～「5」の数字で記入してください。

	実習前	実習中・後
・非常に魅力を感じる仕事である	()	[]
・子どもの成長・発達に関わる重要な仕事である	()	[]
・子ども愛・教育愛にささえられた尊い仕事である	()	[]
・自主的・創造的な活動ができる仕事である	()	[]
・理想とする社会の実現に貢献できる仕事である	()	[]

(3) (教師になるとしたら自分が) 今後身につけることがら

* 左側の () の中には実習前の自分の意識を、右側の [] の中には実習後の意識を、
「1」～「5」の数字で記入してください。

	実習前	実習中・後
・幅広く深い一般教養	()	[]
・専門分野（教科専門）の学力	()	[]
・教職に関する基本的な教養	()	[]
・学習指導の理論と技術	()	[]
・生徒指導・生活指導の理論と技術	()	[]
・教師集団の一員としてのあり方	()	[]
・子どもの人権についての理解	()	[]
・社会性	()	[]
・優れた人格	()	[]
・豊かな人生経験	()	[]
・充実した体力	()	[]
・何らかの特技	()	[]

たものと考えられる。

数値の低いのは、昨年と同様に「話すことが論理的になった」(3.2)である。実習期間が、延長されたとはいっても、家庭科は講義よりも実習等の授業形態が多いことにも関連すると考えられる。昨年と異なるのは「(公共心等) 道徳的問題を真面目に考えるようになった」(3.6)の数値が低い点である。本年度は実習中、このような面に目を向ける機会が少なかったのか、「どちらともいえない」という回答者が多かった。本年度は「積極性が出てきた」(3.9)として自分を見る者も、半数以上であり、実習後の日常生活における変化を自覚している学生が多いといえよう。

5つの小項目からなる(2)の結果は以下のようである。ここでは実習前・後の変化を示した。いずれの項目においても、実習後、教師という職業を肯定的に考えるようになったことが示される。特に変化の大きいのは、「非常に魅力を感じる仕事である」(前3.0, 中・後4.0), 「子ども愛・教育愛に支えられた尊い仕事である」(前3.4, 中・後4.2)「自主的・創造的な活動ができる仕事である」(前3.2, 中・後3.9)の項目であり、昨年とほぼ同様の結果である。特に「子どもの成長・発達に関わる重要な仕事である」では、実習前もそれを認めていた回答者が多かった(4.1)が、それを否定的にとらえていた学生であっても、実習後「どちらともいえない」とする1名以外、肯定的なものに変化(4.2)している。実際の場に身を置くことにより、教師の仕事の意味を自覚した学生が多いと考えられるのは、前述の場合と同様である。「理想とする社会の実現に貢献できる仕事である」は、実習前(3.1)に比べると後(3.7)では、それを受け入れるようにはなっているが、変化の内訳は、やや複雑である。すなわち実習前に「強くそう思う」としていた者が、1名ではあるが、実習後「どちらともいえない」と否定的に変化している。また、実習前「そう思わない」としていた18名中の5名が実習後も同じく否定的である。実習前に「そう思わない」としていた10名が1名を除いて実習後も「どちらともいえない」「そう思わない」として肯定的ではない。本年度の場合、教育実習後、教師に対して批判的な見方をするようになった実習生も若干ではあるが認められる。客観的に物事を見ることが出来るようになるのは望まれることであるが、自己中心的な見方で実習をとらえている場合もあり、多様な角度からの考察が必要であろう。

ほとんどの学生が、教員の仕事の意味をとらえ、その責務についての自覚を持って実習に当たって来たことが、実習前・後の意識の変化から読みとることができよう。そこには、実習前・後を通して実習校ならびに実習担当教諭と学生、あるいは大学との密接な連携・連絡も関連するものと考えられる。

次に、12の小項目からなる(3)の結果を考察する。全項目中、実習前・後ともに数値の高いのは「専門分野(教科専門)の学力」(前4.7, 中・後4.9)「豊かな人生

経験」(前4.4, 中・後4.9), 「学習指導の理論と技術」, (前4.3, 中・後4.6)「生徒指導・生活指導の理論と技術」(前4.3, 中・後4.6)「幅広く深い一般教養」(前4.2, 中・後4.8)「優れた人格」(前4.3, 中・後4.3)である。特に、実習後に変化の大きい順にみると、「何らかの特技」(前3.6, 中・後4.4), 「充実した体力」(前4.0, 中・後4.8), 「幅広く深い一般教養」(前4.2, 中・後4.8)である。これらは、実習期間延長に伴い、生徒とのふれあいの機会が多くなったこと、授業時数も増えたこと等に関連するであろう。「教師集団の一員としてのあり方」(前3.7, 中・後4.2), 「社会性」(前4.2, 中・後4.6)は、実習前よりも後にそれを身につける必要性を感じる度合いは全体として高くなってはいる。しかし、実習前より後に否定的になったり、「どちらともいえない」としている者も若干認められる。これは先の(2)で指摘した点と共通のものがあると思われる。

実習後、その必要性を感じた項目として昨年と異なって変化の大きいのは、「豊かな人生経験」(前4.4, 中・後4.9)である。本年度の実習生の場合、大学卒業後、すぐに教職に就きたいとする割合は必ずしも高くはなく(37%), 将来にその夢を託している者も少なくない。このことにも関連するであろう。様々な人生経験を積んでから教職を考えたいという、将来に希望を託している学生にも対応できる生涯学習的な意味を持つ教職課程の教育を視野に入れる必要もあろう。

おわりに

平成16年度の「教育実習録」, 「教育実習報告会資料」及び「自由記述法や選択肢法による振り返り調査」の結果等をもとに、教育実習による教職に対する学生の意識の変容を中心としてみてきた。

実習期間が3～4週間と延長後の2年目の実習である。おおむね実習内容は変わっていないが、実習期間が長くなったことで学生は、確実にその体験を通して広い視野から教育をとらえ、学校教育への洞察力を高めてきていることが明らかになった。

例えば、教師という職業観や良識ある社会人を基盤としての教師としての在り方などにも目を向け、専門職としての教員の職責について考えを及ぼしている学生もいる。さらに教育実習前には、教職を漠然としてとらえていた学生もそれなりに自分の生き方と関連させた考えをもつようになったなどである。

また、実習期間が長くなったことに関連すると思われるが、授業の改善を図る機会やゆとりが生じ、学生にとって学習指導の工夫、改善を図ることが可能となった。その結果、生徒の心に響くやりがいのある授業を体験し、その喜びを体得するなど「教師としての充実感」を深くしている。その際、学生は一様に生活を基盤とした内容で構成される家庭科に関する専門的知識の不足を痛感するとともに、大学での勉学や生活経験を通して会得した知識や技術を家庭科の授業に向けて再構成する力の必要

性を訴えている。

教師としての喜び、充実感を感じる一方、「教える」ことの重大さに気付き、教師としての使命の重さの自覚を確認した者もいる。授業をする場合、何を伝えたいのか、どのような能力を身につけさせたいのか、教える目標を明確に教師がもたなければ授業は成功しない、生徒に訴える授業をすることは出来ないなど、教育現場でこそ得られる貴重な体験をしている。

さらに、それらの体験をする過程で人（生徒）の話に耳を傾け、理解しなければ己の思いを伝えることができないことに気付き、一人一人の生徒について真に理解した上で生徒に向き合う必要を実感している。その体験から、人と人とのつながりの中で生徒の能力の伸長を図るためには、教師としての自己の確立が重要であることなどの自覚を深めた学生が少なくなかった。

教育実習の体験により、教職に必要な幅広い識見は無論のこと、教師として絶えず自分自身を成長させ、高めていくことが必要であることを感じ取った学生が少なからずいたことは、社会人として生きていくためにも貴重な変容であった。

しかし、学生の実習記録に示されているように、教育実習期間中の経験や体験の内容は実習学校によって相違があり、そのことが学生の変容の違いとなって表れている場合もあるのではないだろうか。また、多様に変化している教育現場や生徒の実態について理解を深めさせ、教育実習に当たったの各自の具体的な課題を持たせることもその変容を促すことになるのではないか。教員養成を担っている大学側としては、できるだけ学校現場と情報交換や相互交流を図り、学生にとって有効な教育実習が行われるようカリキュラムの編成についても改善を図ることも課題となろう。

学生は「生きた体験」をすることにより、確実に大きくその人間性を成長させている。大学教育の中での教職課程履修やそこにおける教育実習は、生涯学習を含め生き方の基盤力を培い、豊かな人生を築いていくことへ大きく寄与するものと思われる。

参考文献

- 1) 櫻井純子, 天野幸子, 尾崎沙和子, 小澤滋子, 板谷幸恵: 女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察. 女子栄養大学紀要, 第34号, p101-113 香川栄養学園, 東京 (2003)
- 2) 小澤滋子: 教育実習事前指導における実習に関するビデオ視聴についての考察. 言語と交流, 第7号, p82-94, 言語と交流研究会, 東京 (2004)
- 3) 櫻井純子, 尾崎沙和子, 小澤滋子: 平成15年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「学生の意識変容からみた家庭科・教育実習事前指導におけるビデオ教材の役割とその開発による研究」の研究成果の一部。
- 4) 尾崎沙和子, 小澤滋子, 野尻幸子, 日高英行: 教育実習にかかわる指導についての考察. 女子栄養大学紀要, 第18号, p213-230, 香川栄養学園, 東京 (1987)
- 5) 尾崎沙和子, 小澤滋子, 常盤侂子: 教育実習にかかわる指導についての考察(Ⅱ). 女子栄養大学紀要, 第19号, p205-216, 香川栄養学園, 東京 (1988)
- 6) 尾崎沙和子, 小澤滋子: 教育実習にかかわる指導についての考察(Ⅲ). 女子栄養大学紀要, 第20号, p229-248, 香川栄養学園, 東京 (1989)
- 7) 櫻井純子, 天野幸子, 尾崎沙和子, 小澤滋子, 板谷幸恵: 女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察. 女子栄養大学紀要, 第34号, p110-113 香川栄養学園, 東京 (2003)
- 8) 町田健一, 坂本信昭, 黒澤英典, 小澤滋子, 次山信男: 平成10年度～平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書「教育実習及び介護等体験の教育的意義と内容方法に関する総合的調査研究」. 教育実習校(中学校)における実習生の受け入れ体制に関する調査(中学校教員), 教育実習に関する意識調査(教育実習生)(黒澤英典 編著), p29-56 (2000)
- 9) 櫻井純子, 天野幸子, 尾崎沙和子, 小澤滋子, 板谷幸恵: 女子栄養大学・家庭科教職課程履修生の教育実習に関する考察. 女子栄養大学紀要, 第34号, p110-113 香川栄養学園, 東京 (2003)